

甲府市南部の農業用水と水害を考える

齊 藤 純 悟

一 はじめに

甲府市は、本州のほぼ中央に位置する山梨県の県庁所在地で、この中央部にあたる甲府盆地の北辺に立地する。

本市の経度、緯度は次の通りである。

東 経 一三八度四〇分

北 緯 一三八度四三一ノ

三五ノ三五ノ

三五ノ五二ノ

極東（黒平町国師岳大弛）
極西（山宮町西岬）
極南（大津町南端）
極北（黒平町国師岳西一、四五〇ノ）
総面積は一七一、一一キロメートル平方メートルで県総面積の三、八パーセントにあたり、南北約三一、四九キロメートル、東西約一二、四五キロメートルと南北に細長く（『甲府市統計書』昭和六二年度版）、

最北部の国師岳の山岳地域には甲府市の最高海拔である金峰山（二、五九五）・朝日岳（二、五八二）・国師岳（二、五九一）など二、〇〇〇メートル級の山々があり、これが南に向かうにつれて低くなり、帶那山（一、三四七）から愛宕山（四二八）、および湯村山（四七〇）を最末端として平地部と接している。

そしてここからはゆるやかな南傾地形となり、これが甲府市最末端で最低海拔二五〇メートルの大津町まで続き、笛吹川を挟み中道町・豊富村と境を接する。

この平地部というのは、これらの山岳地帯に源流を持つ荒川・相川の本支流、また関東山地北東から南下する笛吹川、そして南アルプス連峰の北端から流下する釜無川本流をはじめとして、市内を流れれる河川の氾濫により形成された複合沖積地帯であり、一般に甲府盆地として知られている。

甲府市の場合、北側より続く山間地帯を除いた平坦地域が市街地に相当するが、県全体の面積からみてもほんの僅かなこの平坦地上有、甲府市をはじめとして隣接の市町村の市街地および農作地帯が展開されている。

甲府市は市政施行後、四次にわたる合併を行ない市域の拡張を計り現在に至っているが、旧市域は、おおまかに言うと江戸時代に城下町として発展した現甲府市の中心街にあたる地域と、これより以前の武田時代にやはり甲府と呼ばれ城下町を形成していた、現JR東日本中央線甲府駅裏手・北側の地域を合わせたところがこれに相

当している。ここを中心にして商業地域・市街地域を構成していた

が、近年は人口ドーナツ現象により、合併により拡張した市域へも

もつようになり、いまや広域市街・商業圏を形成するに至っている。

甲府市南部地域はこの中にあって、市内に残された数少ない農作

地帯を有する地域であり、東は石和町・西は玉穂・昭和町・南は東

八代郡中道町・豊富村と境を接している。地区としては湯田・伊勢

地区、それに合併以前に旧西山梨郡に所属していた現在の山城地区、

および旧中巨摩郡に属していた現在の大里・国母地区がこれにあた

り、ここは第二次世界大戦後開発が進められた地区であるが、近年、

特に国体開催を契機に以前にも増して一層開発が急ピッチですすめ

られている。特に大里・山城地区はこの市街化拡大の影響を受けて

これから大きく変貌を遂げようとしている地域である。

この大里・山城地区では現在、水稻を中心とする蔬菜・果樹栽培が盛

んに行われており、その多くが京浜方面へ出荷されているが、以前

には現在のような安定した収穫は望めない地域であった。

その原因となっていたのが水害であり、これが甲府市内でありな

がら近年まで開発を遅らせていた理由の一つにもなっていた。

この地域の水害を考えるに、ここは古くから農業用水路が発達し

た地域であり、しかもこの用水は釜無川、荒川、笛吹川（平等川）

といった、急流で流域面積が狭く、流路延長が短くて流水の増減

が激しい河川から水を引いているため、これらの河川の増水の影響

を受けやすく、さらにこれら河川に挟まれた低湿地帯であるため

に水吐けが悪かったことも重なり、かえってこの農業用水路が水害

の仲介をしてしまったことも大きな原因の一つに挙げられるであろ

う。

過去、山梨県を襲った明治四十年の大水害や昭和三十四年の台風七号・伊勢湾台風は県内各地に大災害をもたらしたが、この地域も例外ではなく、この水害の様子の凄まじさは、いまなお語り伝えられているところである。このような記録的な大災害は特別にしても、この地域内は並みの台風や大雨といった程度でも、いつも簡単に水害が発生してしまうという場所柄であり、長きにわたり水つき場といいう汚名に甘んじざるを得なかつた。

この「水つき」という言葉は「水漬く」の意味で水に浸るありさまを言い、いうところの鉄砲水や洪水に押し流されるといった表現ではなく、川下で呑み切れなくなつた水が川を、また農業用水路を逆流して人々に溜つて水位を増していき、ついにはあふれ、あたり一面湖水のようになつてしまつという、この地域の水害のもようをよくもの語つてゐる。そしてこの状態が一日、二日続き、水がひく迄の間全ては水の中にあり、この水害の時期が農家の一番の農繁期にあたつたため被害も大きかつた。

前述の水害を契機とした長年に亘る治水事業の結果、このような水害の心配はないとされてからすでに久しく、この地域に対するイメージも現在は一新されている。

近年、このことが幸いし、この地域の本格的な開発に着手せしめたといつても過言では無いであろう。

この地域の開発にあたつて治水事業がもたらした功労の大きさはかくのごとくであるが、当初の農業生産量の向上という目的から考へると、逆に農地の減少を招くという皮肉な結果となつてしまつてゐる。

こうした急激な開発により変貌をきたした地域においては、そこに残された文化や伝統を見出すことが困難を伴うことは言うまでもなく、この地域の農業の将来を考えてみると、農家・農地の減少が一層加速度を増していくことは容易に予想される所である。そしてすでにここでは、毎日目にしているにも拘わらず祖先が残した文化遺産の一つである農業用水の存在や役割、それにつけてこの地域で親たちが水害と闘った事実さえも、人々の意識から薄れているのが現実であり、全国的な傾向とは言うものの、ここでも古い文化や伝統が次第に忘れ去られようとする時代の波がやって来たようと思われる。

現在、この地域の農業用水の現状を見ると、山城地区に關係する用水路は市内の中心部を経由しているため、道路の拡張や整備および区画整理に伴って、これを把握することが困難になってしまっている。さらには既に市街化が進み住宅地になってしまったところも多く、今では、無用の長物化し利用度は非常に低下している。

大里地区でもやはり同様といわざるを得なくなっている。

こうした現状を踏まえ、この地域における農業用水とかつての水害の状況をいま一度再確認し、現況をのべて見たい。

なお、今回ここで扱う甲府市南部地域というのは、現在の国道二〇号線である甲府バイパスより南側地域、特に山城地区に關係する農業用水を中心とした。

二 甲府市ならびに隣接地域の水の流れ

甲府市南部地域の農業用水及び水害を考える場合、その隣接地域との水系の関連や標高差を把握する必要がある。ここでは先ず甲

府市南部地域にかかる持つ水系と、この隣接地域における水の流れを見てみたい。（図1、図2参照）

一 甲府市（荒川左岸・濁川右岸）

荒川の下流部と、濁川本流部、即ち甲府市中心街を西から東へ横切り、市内砂田町地内では直角にカーブして南下し笛吹川に合流するまでの右岸に囲まれた地域の農業用水は、一部を除きほとんどが荒川水系によつて賄われてゐる。ここで濁川について簡単に説明すると、濁川の旧市内に相当する部分は江戸時代の甲府城の三の堀にあたり、同時に城下町の排水路の役割も果たしていた。そして現在も市内の雨水や雑廐水は、この濁川および濁川水系に流れ込んでおり、こうした意味で甲府にとって重要な川である。

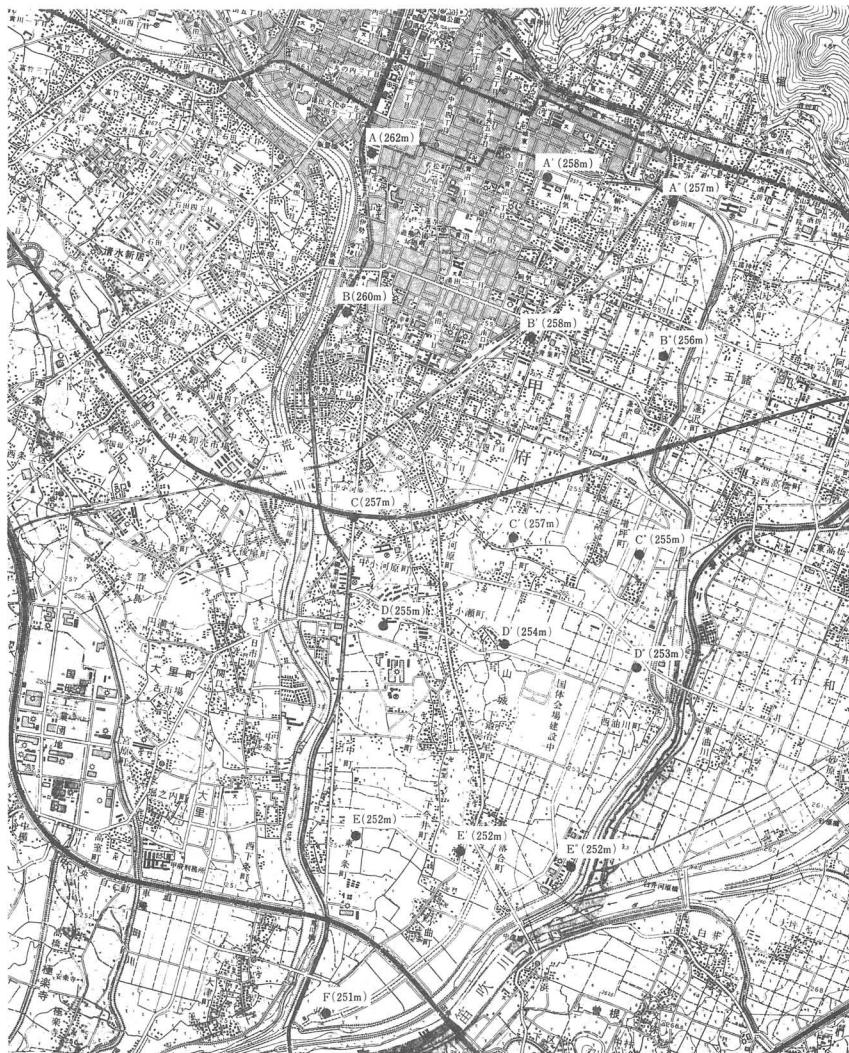
さて、この地域の標高差を見てみると、南北は既に述べたように北側が高く南に向かい除々に低くなっている。

即ち

相生二丁目の相生小学校（約二六二メートル）	(A)
伊勢三丁目の伊勢小学校（約二六〇メートル）	(B)
甲府バイパス河原交差点（約二五七メートル）	(C)
甲府商業高等学校（約二五五メートル）	(D)
東下条町市雇用促進住宅（約二五二メートル）	(E)
五割川・濁川合流点付近（約二五一メートル）	(F)

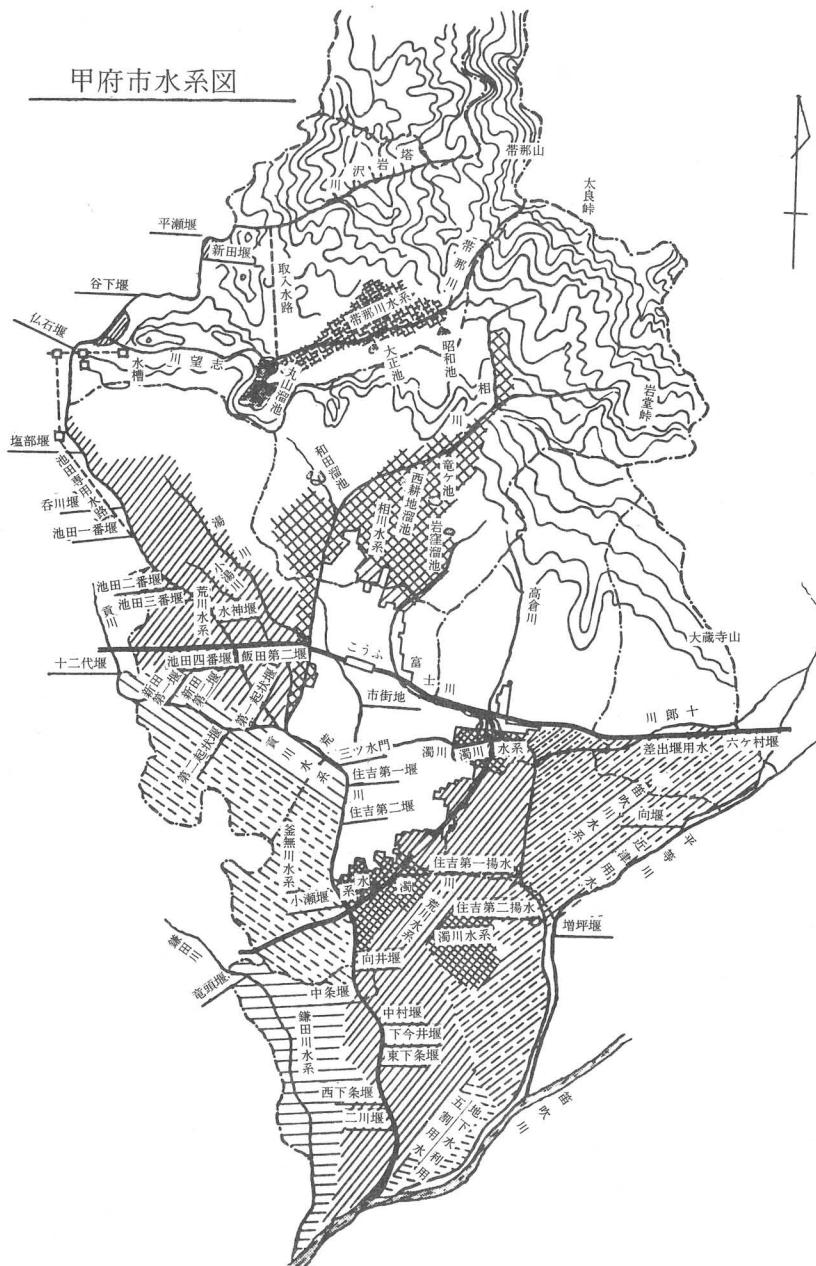
であり、この間約六、六キロメートル、標高差約一メートルである。

次に、いま南北の標高差を見た地点（A～F）から東西に線を引き、濁川右岸の真近（A～F）とその中間（A～F）の標高差を見てみる。



第1図

甲府市水系図



第2図(『甲府市史 市制施行以後』より転載)

(A)	二六二メートル	(A')	二五八メートル	(A'')	二五七メートル
(B)	二六〇	(B')	二五八	(B'')	二五六
(C)	二五七	(C')	二五七	(C'')	二五五
(D)	二五五	(D')	二五四	(D'')	二五三
(E)	二五二	(E')	二五二	(E'')	二五一
(F)	二五一	(F')	二五一	(F'')	二五二

となる。そして、A～Eまでの各地点からA～Eまでの距離と標高差を各々みてみると次のようになる。

(距離)

(標差)

(A～A'')	二、四キロメートル	五 メートル
(B～B'')	二、四	六 〃
(C～C'')	二、三	二 〃
(D～D'')	一、九	二 〃
(E～E'')	一、五	（E～E'') がマイナス〇、五メー トル

これら二つの標高についての結果を対比すると、(A～A'')、(B～B'')においては南北より東西の傾斜が大きいことを示してお
り、(C～C'')、(D～D'')では南北の傾斜がまさり、(E～E'')
においては中央が低くなっていることを示している。

これによりこの地域内での自然水は、上方では西から東へ、下方
に行くと北から南へ流れていくことが理解でよう。これは等高線に
よる水の流れの方向ともほぼ一致し、農業用水の流れる方向とも一
致している。

これはやはり、釜無川、荒川、相川、湯川などの本支流の氾濫に
よる堆積物の影響といふことができるであろう。

一石和町～山城

甲府市向町・七沢町・西高橋町・蓬沢町は平等川を挟み、石和町の唐柏・東高橋と境をなし、甲府市増坪町・西油川町・落合町は濁川と平等川をはさみ石和町の東高橋・井戸・東油川と境をなしてい
る。これらの標高は石和町側で約二五六～二五七メートルの間にあ
り、甲府市側では二五三～二五六メートルの間にある。計算上では
石和町のほうが約一～三メートル高くなるが、地区別にみると平等
川の川上の西高橋町と東高橋付近では約一メートル、また、東高橋～東油川と増坪町～今井町では約三メートルの標高差がある。こ
れを見ると、平等川の流れに従って、東～西へまた北～南へ緩やか
な傾斜地となっているのがわかる。東と北側が高くなっているのは、
東側は明治四十年の大水害以前には、この平等川が笛吹川の本流に
相当していたことによる堆積物の影響と考えられる。なお、明治四
十年の大水害では「甲州の三大水難所」といわれた「近津堤（ちか
づつみ）」が決壊しこの周辺地区にも壊滅的な水害を引き起こした
が、この結果旧石和町から旧富士見村（笛吹川以西の現石和町に相
当する地域）にかけては土砂が約一～二・七メートルほど積もり、
ほぼ現在のような平坦地になつたと言う。また北側が高いのは、高
倉川、大円川、十郎川の扇状地によるものと見られる。この中の地
域で特に目を引かれるのは、蓬沢一丁目と増坪町～上町～下鍛冶屋
町～落合町～今井町～小曲町を結ぶ地区である。これらの町は周
辺に比べて標高が低く、荒川の住吉第一堰から取り入れた農業用水
の末流が、広い範囲の集水をおこない蓬沢一丁目付近に集まり、排
水経路となつていたため、以前は水漬き場として知られていた。ま
た、この蓬沢地区から山城地区の東側にかけては荒川水系と笛吹川

水系、平等川水系が東西からぶつかる地域であつて水防上重要な場所であった。

濁川が大きく東へ向きを変え、再び南へ向きを変えるカーブ付け根の増坪町地内から、蓬沢町・住吉本町の境を通り、甲府市住吉終末処理場にかけて信玄堤と呼ばれる堤が存在していることからも、ここがかつて平等川が笛吹川の本流であった時代に、氾濫から現山城地区を含めた甲府市南部地域に相当する地域のみならず、甲府の町を守るために重要な地域であったことが窺われよう。

—山城—大里—玉穂・昭和町—

荒川を挟んだ山城と大里の標高差は、平均約一メートル程度であり、ほとんど同じ標高であるといつて良いだろう。そして両地区とも荒川に沿つて南へ向かい、なだらかな傾斜地となつており、水の流れもこれに従つている。

この荒川は三ツ水門付近で大きくカーブし、ここからほぼまつすぐに南下してこの地域に至つていて。そしてこの間には多くの堰が設けられており、これらの堰には取水設備が装備されて取水制御は容易に行なわれ、荒川の増水による影響はほとんど心配なくなつてゐる。

荒川に依存する農業用水の割合を、山城地区と大里地区で比べると、堰数、灌漑面積や位置を比べてみると明らかのように山城地区の方がこの割り合がはるかに上回つており、むしろ大里地区的農業

用水は釜無川水系に属していると言つたほうが良かろう。このため水害も主には山城地区では荒川、大里地区では釜無川による影響をうけたといえる。

また、現在は取り壊されてないが、近年まで中小河原町地内に信

玄堤との伝承をもつた堤があつたことは、ここが水難場所であつたとかんがえられる。堤はここから大里第三団地に及ぶが、荒川左岸の一部が大里町に属すことから、川筋がかつてはもう少し東よりも山城方面へ突き当たるような格好で流れていたのではないかとも考えられる。このような古い川筋についての話は、このほかの場所にも数多くあるので、その土地の伝承や字名などとも考え方を研究することもこれからは必要と思われる。

次に、大里地区と昭和町を比べると、約五メートルの標高差があり昭和町の方が高く、大里地区と玉穂町では北側で同じか約一メートルほど玉穂町のほうが高く、南側では約一・二・五メートルも玉穂町のほうが低くなつていて。

ここで水害という観点から考えると、大里地区は釜無川水系の鎌田川・四分川の氾濫が直接の水害の原因となつており、地区内に目をむけると周辺より低い場所をみつけることが出来る。大里地区では窪中島、宮原町、大津町を結ぶ場所がこれにあたり、この場所は一度出水すると水が停滞しやすく、また水の通り道になる。このうち標高の低い大津町はやはり過去において水つき場といわれる水害の常習箇所であつた。

なお、参考のための玉穂町に関して言うと中橋—成島—乙黒を結ぶ場所が同様の地域である。

三 甲府市南部の水系について

甲府市の農業用水と灌漑地域を水系別にみると、次のようになる。

(図2 参照)

水系	灌漑地域
荒川水系	猪狩、平瀬、山宮、羽黒、千塚、湯村、塩部、飯田、住吉本町（一部）、玉諸、蓬沢、中小河原、下小河原、小瀬、今井、下今井、下鍛冶屋、中、東下条各町、大里町（荒川右岸沿い）、西下条町、大津町
丸山溜池	帶那川、塔岩沢川の渓流をここに集め、志望川に流し、志望橋上流の水槽より片山隧道を経て第一号分水槽に送り、さらに第二号分水槽に送る、ここより仏石堰用水に流し山宮地区へ、また第三号分水槽へ送られ池田専用管水路により池田用水へ流れる。
相川水系	相川地区、緑ヶ丘（一部）、飯田町（一部）、相川町（局部分的）、竜ヶ池・松木堀・岩窪堀による灌漑地域。
帯那川水系	昭和池・大正池・仮宿池から上・下帯那町。
貢川水系	高畑、上石田、新田、下飯田、下河原各町。
濁川水系	池添、善光寺、住吉本、中小河原、上各町。
笛吹川水系	(1) 差出堰系（甲運・酒折地区）・(2) 近津堰系（甲運（川田町の一部）・玉諸（向・上阿原・西高橋各町）・山城（増坪・上・小瀬・西油川・下鍛冶屋・落合各町）地区。
釜無川水系	貢川（富竹・徳行・上石田各町）・国母（高畑町を除く部分の地域）・大鎌田（二日市場、西下条町の地域を除く大部分）地区。

これららのうち、甲府市南部に關係するのは、荒川、濁川、笛吹川（平等川）、釜無川、鎌田川各水系であり、このうち鎌田川は本来釜無川水系であり、山城地区には直接に影響が少ないとみられるので、本稿では割愛させていただき、これら関係水系別に農業用水を見てみることにした。

荒川は金峰山の中腹に源流をもち、御岳昇仙峠を経由して平瀬に至り、さらに敷島町との境、山宮町・千塚を通り市内に入る。そして、荒川橋に至り、この直前に湯川と一緒になった相川と合流し、ここから約二〇〇メートル下流では貢川と合流。飯豊橋をすぎ約二八〇メートルほどで「三ツ水門」の取り入れに至る。「三ツ水門」は、荒川から甲府市南部地域への農業用水のうち最初の取り入れ口にあたっており、南口・里吉・蓬沢・山城方面の灌漑用水である。そして、このすぐ下流の中橋ブールの土手側に「住吉第一堰」と言われる取り入れ口があり、これは住吉本町方面を灌漑する。このあたりからまっすぐ南下しはじめ、伊勢町と高畑の境にかかる千秋橋に至る、ここから約六〇メートル下流の伊勢二丁目六の六付近には「住吉第二堰」と言われる農業用水の取り入れ口がある。やはりこの水路も伊勢、住吉を経由して山城方面を灌漑している。そしてここから約七二〇メートル下流で沼川と合流し、さらに南下し身延線・甲府バイパスと交差するが、身延線架橋の約九〇メートル上流には「小瀬堰」といわれる農業用水の取り入れ口があり、これは中小河原町を経由して上町に至り五割川となる。また、甲府バイパスの架橋より約八〇〇メートル下ると万才橋に至り、約一七五メートル下流で四分川と合流する。

さらにこの合流点の約七五メートル下流では大里町方面へ「向井堰」といわれる農業用水路から用水をひいているが、ここが荒川から大里方面への農業用水の取り入れ口の最初である。

ここから約二五〇メートル下ると、山城方面へ「中村堰」「下今井堰」いう農業用水の取り入れ口が二つあり、ここからそれの中

町、上今井の一部と下今井町がこれを利用している。

ここを過ぎると、約三三〇メートル下流に大里方面へ「中条堰」といわれる取り入れ口がある。これは大里町三四二八番地の「耕南自治会館」地内で最初に「向井堰」より取り入れられた農業用水と合流して、西下条町へ流れる。そして、ここが荒川からの最終の農業用水である。

これらの堰から取り入れられた農業用水の通過経路を堰別に掲げてみる。

(1) 三ツ水門から取水して相生三丁目中橋ブール東を南流、新平和通り下を横断し車線歩道に沿って千松院入り口に至る。ここより伊勢一丁目地内に入り東へ分水、本流はそのまま一蓮寺・遊亀公園の池へ流れ、池の東側より排水され神竜川となる。

南下するもう一つは同一丁目二一一六の北側で分水、東へ流れ遊亀公園バス停までゆき南下、公園敷地の南境沿いを東へゆき太田一三一九でクランク状に曲がり青沼三丁目と湯田一丁目町境を東に流れ幸行川となり、そのまま朝氣三丁目にゆく。

また伊勢一丁目二一一六の分水地点から南下したもう一つは、約

一〇メートルほど下で東に折れ再び南下し、伊勢一丁目一〇一三丹沢電気敷地内を経由し、伊勢通りを南下し、山梨中央銀行南支店南側を東へゆき、幸町九一三七と三八の間を南下し、同九一三〇武田食料内を通りぬけ、東に向きを変え湯田二丁目を経由し南口町に至り、JR東日本延線南甲府駅北の踏切りを越え青葉町から住吉本町へ入る。

(2) 住吉第一堰から取水して相生三丁目中橋ブール西に至り、荒川左岸沿いの土手下を南下、伊勢二丁目伊勢小学校北にて平和通りを横断して分水し、そのまま南下する(分水は伊勢小学校の北を東に進み、県営伊勢アパート北を経由し、幸町の川口学園北から湯田二丁目甲府市立南中学校の南を東に進みJR東日本延線を越え住吉本町を経由し、甲府市住吉終末処理場を通り増坪町から濁川へ落されている)。南下した用水は伊勢三丁目三一二九で左折し、同九一一二で分水し、一つは住吉一丁目の住吉神社敷地内を通りJR

身延線を越え住吉本町、上町、増坪町へと流れる。もう一つは伊勢四丁目から住吉二丁目、中小河原町、下小河原町へと流れいく。

(3) 住吉第二堰より取水して伊勢三丁目天ぶら新かげつ東に至り、元甲府春風寮西より身延線下に南流して分水（分水は東に流れ主要地方道甲府・玉穂・中道線、甲府バイパスを横切り、下小河原町へ流れる。）、本流は中小河原町一、六三四倉島完二氏宅北にて小瀬堰と合流、山梨技能開発センター南から五割川・新五割川を経て蛭沢川へ入る。

(4) 小瀬堰より取水して荒川左岸沿にいに南下、中小河原町一、六二〇上中製材店にて分水し（分水は中小河原一、六三四倉島完二宅北にて住吉第二堰と合流）上今井町を経て五割川へ入る。

(5) 向井堰より取水して荒川右岸沿いの大里町を灌漑、流川となつて鎌田川に合流。

(6) 中条堰より取水し、向井堰と同様な経路をとる。

(7) 中村堰より取水し、上今井町と中町の境界を経由して、下今井町地内から五割川へ入る。

(8) 下今井堰より取水し、中町・東下条町・下今井町を経て五割川へ入る。

(9) 東下条堰より取水し、荒川左岸の西下条町地内を通つて蛭沢川へ入る。

(10) 西下条堰より取水し、大里町・西下条町を経て流川となり鎌田川へ入る。

(11) 二川堰より取水し、西下条町・大津町を経て流川となり鎌田川へ入る。

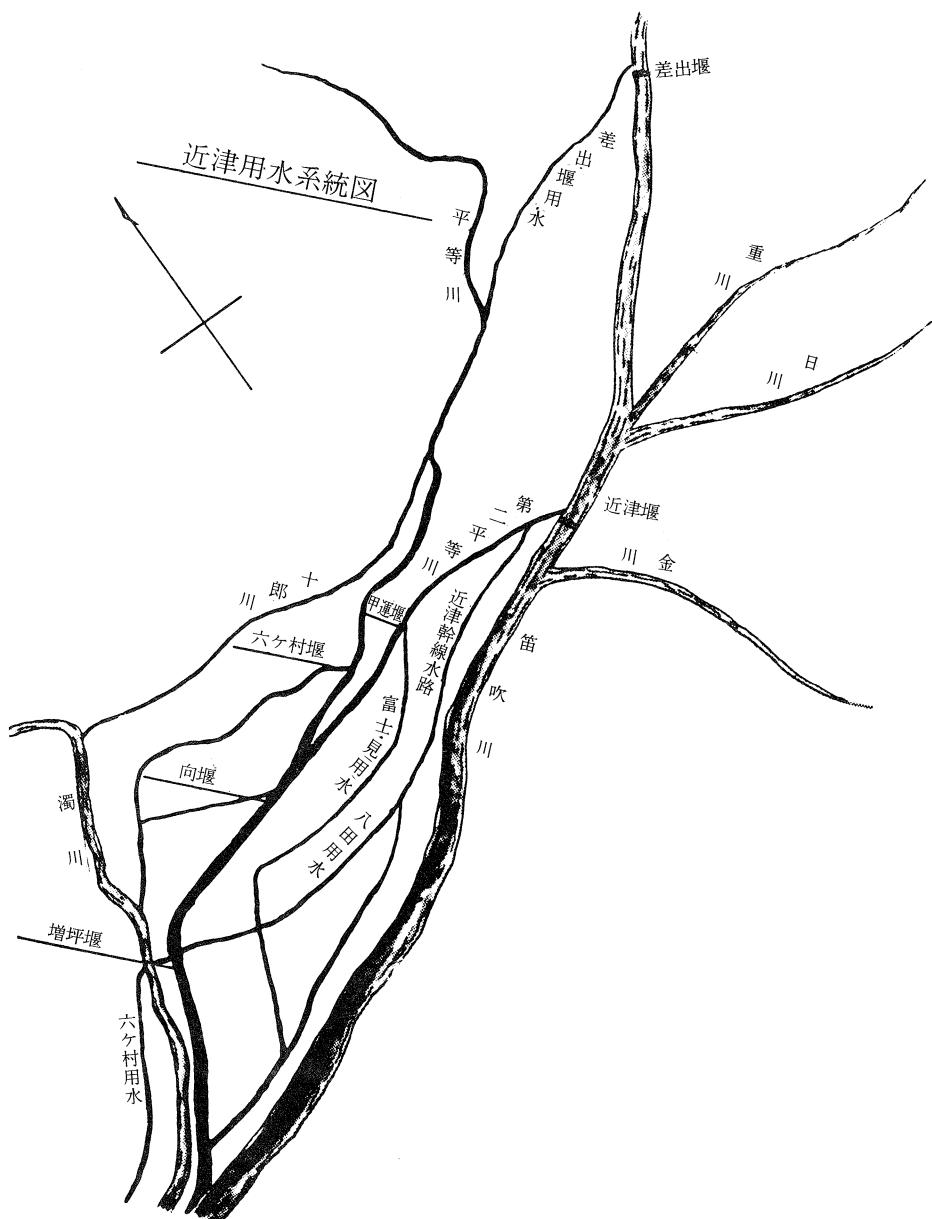
以上このほかあわせて、荒川からの農業用水取水施設は甲府市で

一九ヶ所、隣接の敷島町で八ヶ所合計二七ヶ所もあり（甲府市総合計画審議会資料『現況と問題点』昭和六十二年・甲府市。なお昭和四十九・五十年の荒川多目的ダム建設に伴う『荒川沿岸農業用水実態調査』では堰数は三〇ヶ所となつている。『荒川ダム』昭和六十年・山梨県土木部荒川ダム建設事務所）、灌漑期には下流に行くに従い減少し用水不足をきたしていたが、現在は荒川多目的ダムの完成により安定利水が確保されている。なお、(1)三ツ水門から農業用水は宅地による灌漑面積の減少が著しい（『市勢と現況』昭和四十五年・甲府市では四四へクタール、『荒川ダム』では一ヘクタールに減少）。また、河川の改修や汚染といった農業環境の変化は、小曲町などにみられる地下水利用とするという新しい傾向を生み出している。

2 濁川水系

濁川水系は他の水系群と違ひ、甲府市内の污水の排水を一手に受け持つ重要な水系である。このため最近は環境汚染問題でもなにかと取りざたされている。

濁川水系の河川は、濁川、蛭沢川、十郎川、大円川、高倉川、藤川等があり濁川本川は、市内宝一丁目二一二JR東日本中央線鉄橋暗渠から始まり、市内中心部を南下し、中央四丁目九にて東に向きを変え途中城東四丁目と同五丁目境にて藤川、やはり同五丁目で高倉川、砂田町・善光寺一丁目・酒折一丁目境で大円川と合流し大さく南に向きを変え、里吉二丁目・国玉町境で十郎川と合流、そして増坪町で野間川と合流し、最終的に大津町で笛吹川に合流する。この間延長約十五キロメートル、河川勾配は千分の一という緩やかな流れである。



第3図(甲府市史 市制施行以後 より転載)

そして、水利施設としては次のものがあった。

(1) 里垣第一水門—旧池添町（城東二丁目）で取水、善光寺町を灌漑。

(2) ハ 第二水門—旧善光寺町（城東五丁目）で取水、善光寺。

(3) 住吉第一揚水—住吉本町で取水、住吉本町・中小河原町を灌漑（昭和三十七年より使用停止、同四十

里吉町を灌漑。

(4) ハ 第二揚水—増坪町で取水、上町を灌漑（昭和五十一年

九年撤去）。

（4） ハ 第二揚水—増坪町で取水、上町を灌漑（昭和五十一年
撤去）。

これらの水利施設は、現在撤去あるいはコンクリートで埋め固められて、現在は使用されていない。これは濁川の汚染が進んでしまったことや、この川を利用する耕地面積の減少または作地転換、汚染進行のために他に新たな灌漑施設の建設をしたことによるものである。なお（1）、（2）は地元、（3）、（4）は市経済部農政課調べである。

3 平等川水系

平等川は、明治四十年の大水害以前には笛吹川の本流であったことはよく知られる。

その後、笛吹川の流路変更工事が行なわれて、笛吹川の本流は石和の東を流れていた鶴飼川の河川流域に変更となり、旧本流は廢河川となっていた。この廢河川を利用して大水害で決壊した「甲州の三大水難所」の一つ「近津の堤」があった付近の笛吹川から水を取り入れ「近津用水」とし、明治四三年に富士見・甲運・玉諸・住吉・山城・白井河原の村々が「近津水利組合」を編成した。

現在、平等川から山城地区への農業用水路は、増坪町地内にある増坪堰から増坪町七九一一「甲府市農業センター」東側へ、濁川の川底を伏越にして六ヶ村用水へ通しているが（図3参照）、甲府市内からの取水堰はことと向町の向堰の二箇所である。この用水は増坪、上、小瀬、西油川、下鍛冶屋、落合各町を経由して小曲町内に入り、同町地内で国体会場中央を流れ来る蛭沢川へ合流する。

四 おわりに

以上、おおまかに甲府市における水系、ならびに農業用水をながめ、過去の水害のもうついても触れてきたが、近年の急速な都市化の中で農業用水の現況を把握することが困難であることを実感した。私自身、現況を十分把握しているとは言い切れないのであり、これを機会に今後もこの問題に取り組みたいと思っており、皆様のご教示に預かりたいと考えている。

本稿では特に荒川からの農業用水について調べたが、その複雑さに驚いている。特に市内中心部については地下に埋まっている部分も多くあり、その規模や流れる方向の農地の存在から、それ相当の水量を有しても良いと思われる用水路が空であったり、地図上には明確に存在してもまるで役立たずといった名ばかりの用水路も多くあった。それは、小規模な水利施設も同様であって、管理体制にいささかの不安さえいだかせるものもあった。

これは、全く機能を成さないこれらの水利施設が水利権という旧規を盾に放置されることで、新たな災害・環境問題を引き起こすのではないかという不安であり、これからきっとなんらかの対策を必要とすることであろう。

また、水害について言うと、ここではふれなかつたが河川・用水路の合流点各所に滯水処理のためのポンプや逆水防止扉の設置が行なわれており、住宅地はあたかも要塞の如くなつており、今のところ水害の心配は無いとされているが、反面では農業用水の取り入れ口の開閉は人間に頼つていてことや、排水施設のゴミによる詰まり、そして、いまなお低地浸水箇所・同予想箇所もあるなど、全て

問題が解決したとは言い難いのである。

現在、濁川を中心として河川の環境汚染問題が話題となつてゐるところであるが、これも含めて、ここ暫く大きな水害を経験しない我々は、水や水害に対してもう少し関心を持ち、現実を知ることが必要であると今回痛感した次第である。

（市史編さん調査協力員）